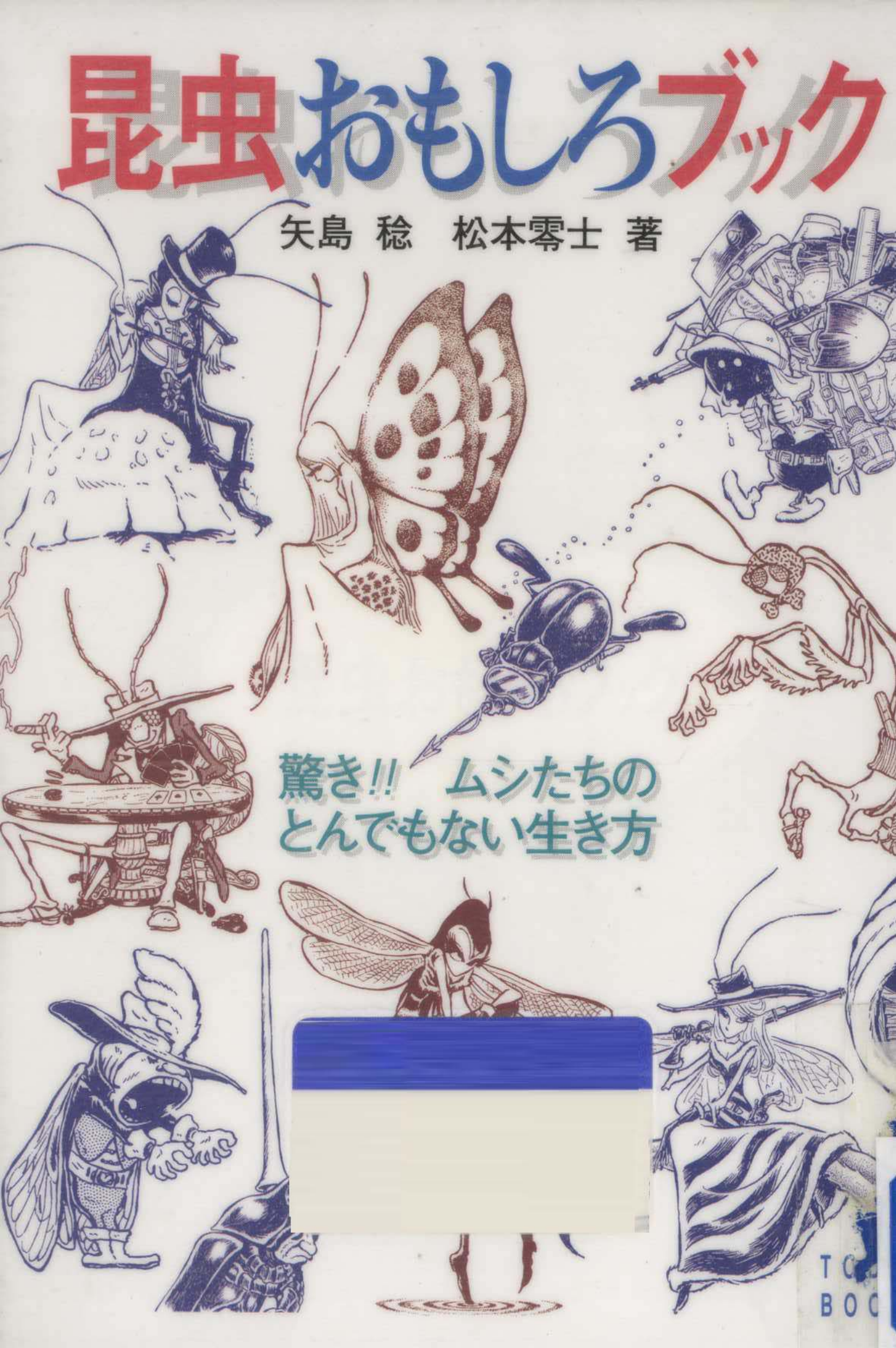
昆虫おもしろブック

矢島 稔　松本零士 著



驚き!!　ムシたちの
とんでもない生き方

主婦と生活社TODAY BOOKS

昆虫おもしろブック

著　者　矢島 稔＋松本零士
発行者　真尾　栄
発行所　株式会社主婦と生活社
〒104　東京都中央区京橋3-5-7
編集部　☎03-3563-5320
販売部　☎03-3563-5121
振替　00100-0-36364
印刷所　松濤印刷株式会社
製本所　小泉製本株式会社

カバーデザイン／TBDI
カバーイラスト／
松本零士

©本書の全部または一部を無断で複写複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。

ISBN4-391-12049-6 C0176
落丁、乱丁、その他の不良品はお取り替えいたします。

©M.Yajima　R.Matsumoto 1997 Printed in Japan

昆虫おもしろブック

江苏工业学院图书馆
藏书章

矢島稔
岡本泰士

驚き!! ムシたちの
とんでもない生き方

知的エンターテインメント
TODAY
BOOKS

文庫化にあたって

見近な生きものといえば、まず昆虫があげられる。チョウは美しいし、ホタルを見るためにわざわざ遠くへ出かけることもある。

しかし一方では、イモムシ、ケムシは見たくないし、へっぴりムシのガスはいやだし、ハチに刺される恐怖はついてまわる。

こうした悪い面だけがニュースになり、ついでに昔からの〝害虫〟イメージが加わって、ムシがきらいな人たちがふえてしまった。

その上、自然を守るのは採集しないことだという風潮が広まって、本当に保護しなければならない昆虫は絶対に採ってはいけないのだが、モンシロチョウも採ってはいけないということになって、とうとう昆虫は遠くから見るものになってしまった。

小さい頃、バッタを採ると口から出す汁が指について、とても臭い思いをしたり、アゲハの幼虫をつつくと黄色い角を出すのをおもしろがったりした経験をもつ人は、そういう形で虫や自然を知り、結局、人間の存在まで考えるようになった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

昆虫はじかに触れないと、何も教えてくれない。つまり『昆虫記』がおもしろいのはファーブルが自分で観たり、ためしたりしたことを読んで、自分もそこで擬似体験をしているからである。

この本は少し内容をおもしろくし、漫画家の松本零士さんに人間くさい絵を描いていただいた。松本さんも熱烈な昆虫少年だったから本質をついた、その上おもしろい内容に昇華させた絵をたくさん入れてくれた。

人の顔をしたアリやカマキリ、妖艶なホタルの精は、じっと見つめた人の心に生まれてくる「愛すべきムシたちのイメージ」である。

こうしたイメージと向きあい、語りあうとき、昆虫たちは豊かな表情を見せ、面白いしぐさをこっそりしてくれる。

松本さんはこういうつきあいのできる人だし、それを絵にできる才人だから、誰も描いたことのない昆虫たちの姿を紹介してくれたのである。

昆虫を知りたい人、楽しんでみたい人、今までは好きになれないと思い込んでいた人たちに、とにかく読んでいただきたい。

そして野外でほんものに会ってほしい。ほんものはそっけなく、照れ屋で逃げ出すが、みんないいヤツで、しだいに正体を現わしてくれる。だって昆虫は人間の何十倍も大昔から世代、進化を重ねている大先輩だから、環境の

変化に敏感で、生き残る術をいくつも知っている。自分に合った生き方を知っている生き方の達人たちなのだ。

ただ、たずねなければ答えないし、人間だけしかわからない言葉を使ってはいない。

この日本語版、昆虫世界の不思議さとおもしろさをどうぞ堪能していただきたいと思います。

矢島　稔

目次

プロローグ――うらがえしの生きもの〝昆虫の世界〟に学ぼう！……11

1 チョウ

絶妙、木遁の術つかいたち……26
チョウに処女なし、売れ残りなし……32
チョウチョとるのに遠出はいらぬ、道に小便して待てばよい……38
これぞ廃物利用の極致、チョウのリンプン……44
スパルタ教育をするヒョウモンチョウ……46
ガンをなおす秘薬はアオムシの研究から……50
恋路をじゃまするシロオビアゲハ……56
不気味に光るガの目玉の謎……60
おどしのテクニック対だましのテクニック……64

2 カブトムシ

大相撲クヌギ場所、横綱はカブトムシ関……68
左官職人から武士に出世のカブトムシ……72

3 バッタ

仮面ライダーは恐妻家（きょうさいか）……80
第三帝国を築くファシストバッタ……84

4 アリ

おふくろ中心の大家族主義……90
地下の秘密奴隷帝国（ひみつどれいていこく）……96
アリにエサをねだるチョウの幼虫……102
正月に起きて働く、へそまがりのアリ……108
引っ越し魔のさすらいアリ……114
子をダシに使うアル中患者（？）のアリ……116
アリを獲（と）ったら二日待て……118

5 トンボ

ニッポン・トンボ列島改造論……124
トンボの目玉は、マルチ・ワイド・スクリーン……128

ウルトラCの空中交尾（セックス）……134
夕凪（ゆうなぎ）、朝凪（あさなぎ）、トンボの変身……138
これがトンボ撃墜法（げきついほう）だ！……142

6 スズムシ

外国人が書いた〝日本ムシ売り小史〟……146
ムシ飼い秘伝（ひでん）、ダニ殺し……150
〝鳴くムシ〟のマッチ箱式分類法……152
ムシは、リンゴと煮干しで飼え……154
誰（た）がためにムシは鳴く？……160

7 セミ

「あの木は鳴くじゃないか！」……168
セミの鳴き声は、大砲（たいほう）の音よりすごい……172
セミの一生は、90％以上が土の中である……176
セミの目はEEカメラ……180

8 ハチ

産みっぱなしから集団保育型まで……184
ハチの世界は、人間社会より進歩している!!……190
虚々実々！　クロアナバチ対ヤドリバエ……192
怪盗ジガバチ……198
必殺仕掛人？　ベッコウバチ……202

9 ホタル

消えて行くともしび、ホタル……206
清らかなホタルの一生……208
ホ、ホ、ホタルよどこへ行く……214

10 カマキリ

花の中の忍者・カマキリ……218
カマキリのメスは、女の中の女!?……224
カマキリを飼う新案自動給餌器……228

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11 ゲンゴロウ

快速艇（かいそくてい）・ゲンゴロウ号 …… 232
子連（づ）れ残酷（ざんこく）物語・コオイムシ …… 236
犬かきスイマー・ガムシ …… 240

本文イラストレーション・松本零士（まつもとれいじ）

プロローグ――うらがえしの生きもの〝昆虫の世界〟に学ぼう！

一匹のムシの中にすべてがある

いっさいが虫けらの中にある――ファーブルの言葉である。

南フランスの片いなか、セリニアンの村はずれに小さな谷がある。ある夏の朝、谷底の石に腰をおろし、かわいた地面の一点を見つめている男がいた。

三人のブドウつみの女が通りすぎていく。そして夕暮れどき、ブドウでいっぱいになったカゴを頭にのせて家路を急ぐ彼女たちは、また、その男を見かけた。

朝と同じ場所で、同じ石に腰かけて、熱心に地面を見つめている男……。

「お気の毒に……。頭が変なんだね……」

そうつぶやくと三人の女は、十字を胸もとできって去って行った。

私は、このエピソードが好きだ。彼こそ、私たちに有名な昆虫記十巻を残してくれた人、ファーブルその人である。彼の足もとの地面では、ひとりぼっちのカリウドバチ、**ラングドスアナバチ**が巣づくりをしていたのだ。

彼はこうしてたくさんのムシと友だちになった。そして知れば知るほど、一匹のムシケラの中につきることのない新鮮（しんせん）なおどろきを発見した。彼は、花のパリに見むきもせず、いなかに

ひきこもったきりの生活を送ったが、その毎日は退屈とはまったく無縁だったという。

昆虫記のどの一巻でもいい。開いたそのページからは、少年のようなファーブルの心の高鳴りが伝わってくるだろう。

神秘の扉は、あけ放たれているのだ。私たちは、ただそこにふみこんでいきさえすればよいのだ。そこから開けている光景は限りなく変化にとんで、奥が深い。しかし、きっかけは簡単だ。たった一匹のムシに心をとめることである。

私にとって、その一匹のムシは、**カラスアゲハ**だった。太平洋戦争の暗い影が、突然なくなった夏、なんでもいいから腹いっぱい食べたいと思っていたある日、私は奥多摩の山をわたり歩いた。工場での勤労動員にあけくれていた私たちにとっては、野山を歩くことが、せめてものレクリエーションだったし、戦争のにおいを早く洗い流す唯一の方法だった。

つま先上がりの山道の草の上に、私は世にも美しいものを見た。サナギからかえったばかりの**カラスアゲハ**！　ゆったりと息づくように開いたハネのウルシヌリのようなしっ黒に、金、銀、らでんがきらめいている。生まれたての一点のほこりもついていない彼女のハネが、やがて風をはらんで舞いあがるまで、私はわれを忘れて見入っていた。ひとめぼれである。

その後、私はなん人もの師や友にもめぐまれることになるが、このときの一匹の大型のチョウチョが、私の昆虫との長いつきあいのはじまりであり、また、決定的な引き金にもなったのである。

昆虫の神秘のドラマの歴史は、気が遠くなるほど長く
その小さな生物たちの世界から見れば
人間の栄枯盛衰など、つかのまの幻影にしかすぎない…

ムシこそ人類の大恩人

私たちが生きられるのは酸素があるからだ。その酸素をだすのは、植物の炭酸同化作用がうけもっている。今以上に人口が増えて、緑の植物が壊滅したら……。綿密なデータのもとに地球の酸素危機を訴え、警鐘を鳴らしている学者も数多くいるのである。

その植物の花が、種子として実るのは、**ハチ**や**チョウ**のおかげである。自然の世界とは、弱肉強食のナマナマしい世界ともいえるが、同時に、それをすっぽりつつみこむ、大きな調和、バランスが支配しているのだ。その中では、私たち人間も、一匹のムシケラも、一本の草も同じ価値の存在でしかない。

現代の医学では、ガンの宣告は死の宣告と同じである。世界の学者が必死になって研究を重ねているが、いまだに完璧な治療法は発見されていない。

だが、ひょっとすると、ガンの秘薬のヒントは**アオムシ**によってもたらされるかもしれない。発ガン物質を調べる学者、放射線の研究者などいろいろいる中に昆虫学者も加わっているのだ。彼は一年中**アオムシ**をいじっている。

その**アオムシ**の中に産卵管をさしこみ、卵を産みつける小さな**ハチ**がいる。その仲間を**寄生バチ**と呼んでいるが、卵からかえった**ハチ**の幼虫は、生きた**アオムシ**の体内を食いあらし、やがて一人前の**ハチ**となって飛びだしてくるのである。

生物の体は、内部に異質なものが侵入すると、自動的に、防ぎょの反応をおこす仕掛になっ

ている。リンパ腺がはれるのも、トゲがささってウミがでるのも、ゲリをするのも似たようなものだ。

ところが、不思議なことに、**寄生バチ**のたまごに侵入されても、**アオムシ**の体の中には、なんの排除作用もおこらないという。そこにはなにかのカラクリがあるはずだ。そのカラクリが解けたとき、ガンのやっかいな、仕組みが解明できるのではないか。もし、ここからヒントがひきだせたら、**アオムシ**は人類最大の恩人、いや恩チュウというわけだ。

もうひとつの王国——昆虫王国

遠く離れて見ると、地球は、生命あるものに満ちた、美しく巨大な宇宙船だといえる。そこに住む動物を見るとき、ふたつの大きな流れのあることがわかる。学校の生物で系統樹という考え方をならったことがあるだろう。

ゾウリムシや**アメーバ**のような単細胞を根っこに、海綿を分岐点として、枝は大きく二つにわかれる。いっぽうの幹は、脊椎を発達させていった動物たち、もういっぽうは脊椎がないかわりに固い皮ふで体を支える無脊椎動物だ。いいかえれば、人や犬など脊椎動物を「内骨格」というが、これに対して無脊椎動物は「外骨格」と呼ぶことができる。

エビやカニを食べたときのことを思いだしてほしい。固いからを破らなければおいしい肉はでてこない。これが外骨格なのだ。いわば鎧に身をかためているわけだが、動くために関節の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com